



また問題が含まれている Bewick's Yankowski's を区別する定義がないことである。前記の「The swans」の中では Bewick's で全編を通じているが、同氏の Bird of Britain and Eupop の中には Bewick's と Yankowski's を明確に図示し、区別されている。

IWRB の調査表のうち分布図には Bewick's swans C. c. bewicki's とあるも Jankowski's は載っていない。一体 Jakowski's swan とは何だろうと不審感が深くなる。

以上、偶感的なことを拉例したが、要約すると

1. コハクチョウを英語で書くとき Whistling swan とするとアメリカコハクチョウと紛らわしい状態になる。学名を付記しなくともよい名がありませんか？
2. Bewicki と Yakowski の特徴とみわけかたについて、何か文献、資料はありませんか。或いは同一亜種の異語か？ 明確にすることができませんか？

## 中海干拓の進行と白鳥の行方

岩 田 正 俊

中海干拓も進行し、揖屋工区と島田工区とは、すでに昨 51 年においてノ切られ、海水表面積は順次減少して僅かに水溝を残すのみとなった。

中海の白鳥は、特に意東白鳥海岸に集ってくるのは年々その数を増加し、51～52 年季には、その数 500 羽を越す日が多くなった。この現象は種々の原因もあるが、石川県の河北潟では干拓の進行と共に、その数を年々減じつつあるのと、何等かの因果関係のあることは否むことはできない。

中海においては、干拓の進行と共に白鳥のねぐらを奪われることを杞憂し、49 年島根県においては、時の環境保健部長と、自然保護課長の名コンビにより、「中海地区水鳥保護対策調査専門委員会」を設置して、その対策を数回協議開催したが、この計画は一向に進まず、その上担当の鳥獣保護の責任にある課長、係長は転任し、新任の担当課長は全くこの方面には、関係も、知識もない一行政官更に過ぎず、在任中先進地視察と称して、某鳥獣保護員を従者として同行し、その結果「将来の学術的研究を待つ」と称して、お茶を濁しているうちに他に栄任して去り、自然保護課も運命を共にして消えた。（後進県を標ぼうしている島根県にはあり得べきことだ。）

一方、「白鳥はもともと宍道湖にいたものだ、中海に住めなくなれば、それを幸に宍道湖にもどってくる。それまで手をこまぬいて待てばよいではないか」との説を称える人もいる。

そもそも中海の白鳥は、宍道湖が不適で中海に移ったと考えている人もいるが、中海の数百羽という大群（52 年にはコハクチョウは日本では最多数となった）の白鳥は、決して宍道湖から移ったものもなく、他から新に飛来したものが大部分である。

昭和 51 年～52 年季の門脇益市さんの、中海の白鳥観察記をよく見ると分るように、意東白鳥海岸の白鳥は、52 年 1 月末から 2 月初旬にかけて、その飛来数が 580 余羽となっている。

そして心配された夜のねぐらは、白鳥海岸の波浪のはげしい日には、急ぎ揖屋工区や島田工区の残水